



美保関の青石畳通り

境 港へ行くなら、美保関によれと勧めてくれたのは母だった。境港に住んでいた頃、父と私を送り出した後に、時々ここを訪れていたらしい。

慣れない土地に疲れると、美しい青い石が敷かれた風情のある小さな町並みを、一人で見たくなったのだという。

母の言う青い石の通りとは、「青石畳通り」と呼ばれる美保関町の本通りだが、わずか二六〇メートルほどで幅は車一台分しかない。山がちな島根半島の小さな入江に築かれた港町なので、メイン通りすら自ずと狭い。

しかし、その規模によらず美保関は、鎌倉期にはすでに海の関所がおかれ、中世日本海水運の中継点として、さらに朝鮮半島にも近く、海外貿易の拠点ともなっており、莫大な富を生み出す重要な港だった。江戸時代になっても、その繁栄は衰えず、廻船問屋が建ち並び、最盛期には遊女が一二〇人を超えたという、文字通りの狹斜でもあった。

小泉八雲は明治二十三年から翌年までにここを訪れ、その町並みを次のように記している。「一方は海で他方は山の麓がぎゅっと迫ってひどくせこましいので、通りの余地は本当に一筋分しかない。しかもその道幅の狭さといったら、海寄りの家の二階か

ら向いの山寄りの家の二階へひょいと飛んで渡ることが出来るようなほどである。そしてその通りが狭いだけにすこぶる画趣に富む」。

この狭い町並みが画趣に富むのは、やはり青石畳通りの存在が大きい。漫画家・水木しげるは、幼い頃にこの青石畳を見て、「古代には大変な技術がある。こんな不思議なものを皆はなぜ不思議と思わないのか」といぶかしんだという。もちろん、この石畳は古代のものではなく、江戸末期から大正にかけて工事が行われ、工費は船頭や廻船問屋の寄進で賄われた。美保関付近で産出する森山石と、北前船で運ばれて来た福井県の笏谷石が、畳のように敷き詰められており、水に濡れると青みが増して美しい。

当時の美保関は、夜ともなれば「芸者が打つ鼓の音、女たちの切なく甘い唄声、三味線をつまびく音、踊りに合わせて打つ手拍子、拳に興じる者のあたりを構わぬ大きな声や笑い声。どれもこれも船乗りたちが遊興に耽る声とそのこだまなのだ」と、小泉八雲が言うところ、西日本でもっとも喧しく賑やかな港町であり、青く濡れた石畳が、灯火に揺れる人々の影を映し出していた。

このように海運で栄えた美保関だったが、明治になると対岸の境港が、港湾として発展するとともに

徐々に衰退し、今は青石畳通りをゆく人もほとんどいない。その通りに面する老舗の旅館に宿をとったが、果たして客は私たちだけだった。

夜がふけ、皓々とした月が、海をしらじらと照らしている。宿のすぐ外が港にもかかわらず、船はおりか海がおだやかで波の音すらしない。かつて数多くの酔客が歓声をあげた美保関の名月を、同行者と二人で眺めている。



美保関の青石畳通り

[交通] JR境港駅からタクシーで約20分

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi